

ドイツ希少豚を導入 交渉5年、初の国外飼育 忠類エルパソ牧場

2018年10月28日

【幕別】町忠類地区で養豚を営むエルパソ牧場（平林英明代表）は今月から、ドイツの希少種「シュベールビッシュ・ハル豚」の飼育を始めた。ドイツ国外で飼育するのは同牧場が初めてで、5年前からドイツの生産組合と交渉し実現した。代表の平林さんは、新たなブランド豚の普及に意欲を示している。

エルパソ牧場ではケンボロー種を約1000頭飼育。放牧による肥育を実践し、「どろぶた」のブランド名で出荷している。

シュベールビッシュ・ハル豚は、5年前に雑誌で知った平林さんがドイツに渡り、現地の生産組合と接触、その後も毎年足を運んで導入にこぎ着けた。

エルパソ牧場に「入居」したのは雄2頭、雌4頭の計6頭。6日に到着した。導入に当たって専用の運動場を整備、「すぐにこの牧場に慣れ、自由に過ごしている」と話す。雌3頭はすでに妊娠。白黒ツートンカラーの体を揺らして牧草やカボチャ、穀物飼料を食べ、来年1月の出産を待つ。

「どろぶた」は通常より2カ月程度遅い約8カ月で出荷しているが、シュベールビッシュ・ハル豚の肥育期間はそれより長くなると予測。初出荷は来年の11月ごろを予定している。年2回の種付けで2年後には母豚を40～50頭にまで増やし、年間100頭ほどを出荷する計画だ。生肉のほか、生ハムやサラミなどの加工肉として出荷する。

ドイツではプレミアの付く豚で、名前を広く知ってもらうため、あえてニックネームを付けずに育てる。平林さんは「肉質が良いので、日本でも評価されるはず。マンガリッツァ豚（ハンガリー固有の希少種）のように『シュベールビッシュ・ハル』も知られていくのでは」と話している。



十勝の環境にも慣れ、餌を食べてゆったりとするシュベールビッシュ・ハル豚（奥は平林さん）

＜シュベールビッシュ・ハル豚＞

ドイツ南西部の都市シュベールビッシュ・ハルで19世紀に生み出された種。牧草の消化能力に優れ、放牧での飼育に適している。ドイツ国内で、有名ブランド豚として流通している。

幕別に幻の和牛「蔓牛（つるうし）」 アイケイファームが道内初導入 「かむほど うま味」

2018年12月2日

【幕別】農業生産法人アイケイファーム（町千住）は、和牛の原種のひとつ「竹の谷蔓牛（たけのたにつるうし）」を道内で初導入した。代表の高橋健雄さんは、「この牛を素（もと）にブランド化した牛を生産して、地域を盛り上げたい」と話している。

蔓牛とは特に優れた和牛の系統群を指し、本州の中国地方で守られてきた種。中でも岡山県の新見市で誕生した竹の谷蔓牛は日本最古の蔓牛とされている。肉は赤身のうま味が強く、ほどよい霜降りが特徴だ。

牛の存在を2年前に知った高橋さんが、竹の谷蔓牛研究会（新見市神郷）の平田五美代表を訪問。最初は警戒されたが、何度も足を運び信頼関係を築き、導入にこぎ着けた。

現在、竹の谷蔓牛を国内で飼育しているのは原産の新見市のほか、宮崎県川南町の1件と幕別のみとなっている。

アイケイファームには7カ月の雄1頭と、12～14カ月の雌2頭が11月8日に到着。同社が飼育を委託する、安彦牧場（町日新、安彦芳一代表）の牛舎でのんびりと過ごしている。「長旅の疲れもあっただろうが牛舎に入るとすぐに落ち着き、北海道の気候にも慣れた様子」と語る。

11月25日には町内の飲食店で試食会を開き、関係者らが“幻の牛”を味わった。参加者からは、「かめばかむほどうま味が出る」「脂身がおいしい」などと大好評だった。

雄牛は来春には種牛としてデビューし、雌牛は繁殖用